

# 鳥取県で、地域医療を目指す人、 募集します。

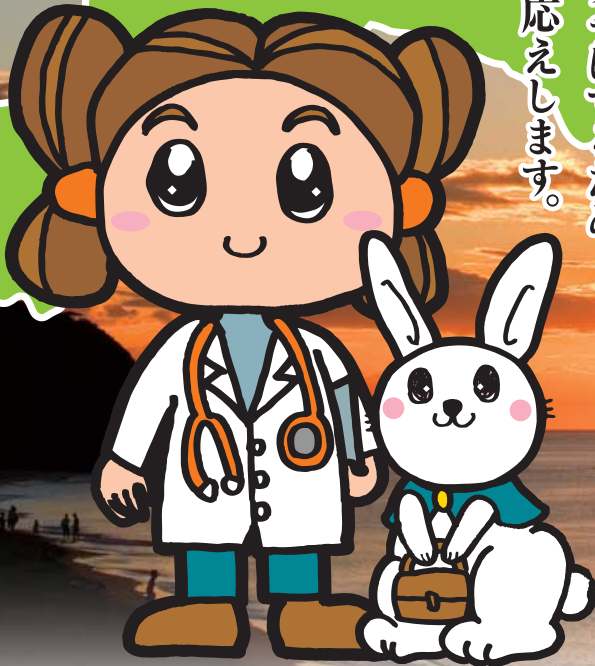
鳥取県では、県内の医療機関での勤務を希望する医師、県外で研修した後にその成果を県内で活用しようとする医師を県職員として任用し、自治体病院等に派遣等を行う制度を創設しました。青く澄み渡る日本海、緑豊かな山々など鳥取県の豊かな自然の中で、医師としての経験を積んでみませんか？

小さな「ありがとう」のために  
大きな夢をのせて…。

(HOPE+DREAM)×PASSION  
||  
THANK YOU

あなたの夢と希望をカタチにするため、  
私たちは情熱を持ってお応えします。

医療の神様  
「おお大<sup>くに</sup>国<sup>ぬし</sup>主<sup>のみこと</sup>命」と、  
神話の地鳥取県



●神話「因幡の白兔」の舞台となった白兔海岸  
鳥取県が舞台といわれている神話「因幡の白兔」で、  
傷ついた兔を救った大国主命は医療の神様とされています。

鳥取県



このみずみずしさを未来へ

鳥取県

鳥取県庁福祉保健部医療政策課

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220 TEL0857-26-7195

FAX 0857-21-3048

E-mail:chiki-iryuu@pref.tottori.jp

詳しい条件等は鳥取県ホームページ (<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>) をご確認ください。

鳥取県 医師確保

検索

トップインタビュー

鳥取大学医学部附属病院長

豊島 良太 氏

この人に注目

鳥取県立総合療育センター  
療育支援シニアディレクター

北原 侑 氏

鳥取で活躍する女性医師

鳥取大学医学部皮膚病態学講師

山田 七子 氏

来たれ研修医!

鳥取県立中央病院

病院探訪

日南町国民健康保険

日南病院

# KLI MI KOS

とっつりの医療

【クリニコス】

冬号

2010 winter



# KLINIKOS

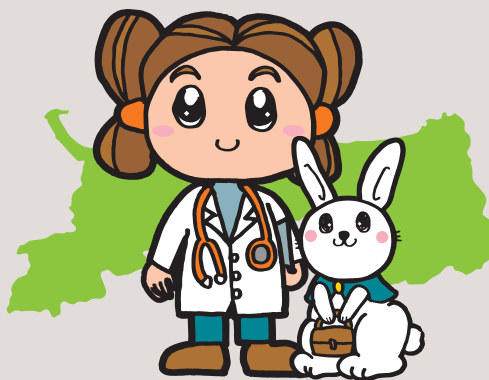
## KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)―ととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部医療政策課



医療の神様  
「**大**国主命」と、  
神話の地**鳥取県**

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大国主命は、医療の神様とされています。

## CONTENTS

### トップインタビュー

4

鳥取大学医学部附属病院長

### 豊島 良太 氏

山陰地方の医療を担い、支えてきた誇りと  
先進医療への自負を未来へ。

### この人に注目

8

鳥取県立総合療育センター 療育支援シニアディレクター

### 北原 侑 氏

小児神経学を学んだ地／鳥取に、  
療育のエキスパートとして留まる。  
なんと幸せな、小児科医人生か。

### 鳥取で活躍する女性医師

11

鳥取大学医学部皮膚病態学講師

### 山田 七子 氏

1よりも10、10よりも100と、経験を積みば積むほど、  
つづける力になるのではないのでしょうか。

### 来たれ研修医!

14

### 鳥取県立中央病院

臨床研修支援室長／内田 博氏

当院の卒後研修で、一目では見抜けない  
各々の中に眠っている可能性を  
引き出してみせる自信があります。

### 病院探訪

16

### 日南町国民健康保険日南病院

院長／高見 徹氏

家庭のベッドは病院のベッド、  
町の道路は病院の廊下。

### 取材先病院MAP



① 鳥取県立総合療育センター <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=3482>

② 鳥取大学医学部附属病院 <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp>

③ 日南町国民健康保険日南病院 <http://nichinan-hospital.jp>

④ 鳥取県立中央病院 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=78429>

## 鳥取大学の、地域医療を 一身に担ってきた 誇りと責任感の歴史

鳥取大学医学部附属病院は、鳥取県唯一の大学病院であり、東は鳥取県東部、西は島根県東部、南は岡山県北部までの広範なエリアを医療圏とする拠点病院。救命救急センターでは、山陰地方全域から重篤な患者さんを多数受け入れています。高度先進医療に関しては、患者さんが関西圏、関東圏の医療機関を頼る必要のないよう、機材、設備、そして、マンパワーの充実を実現しています。当院の歴史を一言で表

現するならば、1893年に前身となる鳥取県立病院米子支部病院が開設されて以来、地域の医療を一身に担ってきた誇りと責任感の歴史と言えるでしょう。その後、1946年に米子医学専門学校附属病院、1951年に鳥取大学医学部附属病院と、それぞれの時代に即した改組を実施しつつ、常に鳥取県を含む山陰地方の地域住民の方々に安心で安全な、加えて、納得していただけの医療を提供する病院でありつづけてきました。そのような位置づけは現在も、まったく変わりありません。

どんな患者さんにも対応しようと、経営上、目先の収支のみを考えればありえない選択もあえてする、気概にあふれた組織が形成されています。用いる患者数は年に数えるほどであるうえに管理経費が診療報酬を上まわる、いわゆる不採算設備である高圧酸素療法が、その好例です。

### 救急医療の再構築では より盤石にすべく 意欲的な施策を導入

当院が提供できない医療があれば、患者さんは病の身を引かずして遠方に出かけなければなりません。私たちがもっとも恐れるのは、そのような光景で



# 山陰地方の 医療を担い、支えてきた誇りと 先進医療への自負を未来へ。

トップインタビュー

**Top Interview**

Ryota Teshima

鳥取大学医学部附属病院長

豊島 良太 氏



### Profile

てしま・りょうた

- 1973年 鳥取大学医学部医学専門課程修了  
鳥取大学医学部附属病院医員(研修医)
- 1978年 鳥取大学医学部大学院  
医学研究科博士課程修了
- 1981年 鳥取大学医学部附属病院助手  
ハーバード医学校(マサチューセッツ総合病院)  
整形外科リサーチフェローとして研修
- 1985年 鳥取大学医学部附属病院助手(整形外科学)
- 1987年 鳥取大学医学部附属病院講師(整形外科学)
- 1988年 鳥取大学医学部助教授(整形外科学)
- 1999年 鳥取大学医学部教授(整形外科学)
- 2003年 鳥取大学医学部附属病院副院長兼任
- 2007年 鳥取大学医学部附属病院院長兼任



す。「山陰地方では、当院が医療の最後の砦である」との覚悟は、経営陣のみならず現場の医師、看護師、コ・メディカルなど、スタッフ全員で共有できしており、大いに誇りに感じています。オンラインワンと自称してはうぬぼれと指摘されるかもしれませんが、そこに付帯するプレッシャーも含めて引き受けていることに、自負を抱いているのです。

2009年3月、そんな当院の救命

救急センターにおいて起きた、センター長を筆頭に半数以上が辞職という事態は、県民及び患者さんに大きな不安を喚起し、慚愧（ざんき）に堪えない出来事でした。

幸いにして関係者の並々ならぬ努力の結果、国立病院機構災害医療センター（東京都）より、当学OBでもある本間正人氏を新センター長に迎え、同時に脆弱であったスタッフ構成もそれまでの倍となる14名体制とし、完全24

時間交代勤務制を構築。山陰地方の3次救急は、崩壊の危機から脱しえました。救急医療体制の再構築に際しては、常に外科系医師と内科系医師がペアを組んで当直に入るシフト、夜間オンコール制、さらには救急担当医の負担軽減を目的とした複数主治医制の導入など、単なる再建ではなく、より盤石な体制とすべく、意欲的な施策を多く導入しています。地域の安心と安全を守る意味で、要となるのは、やはり救急医療でしょう。

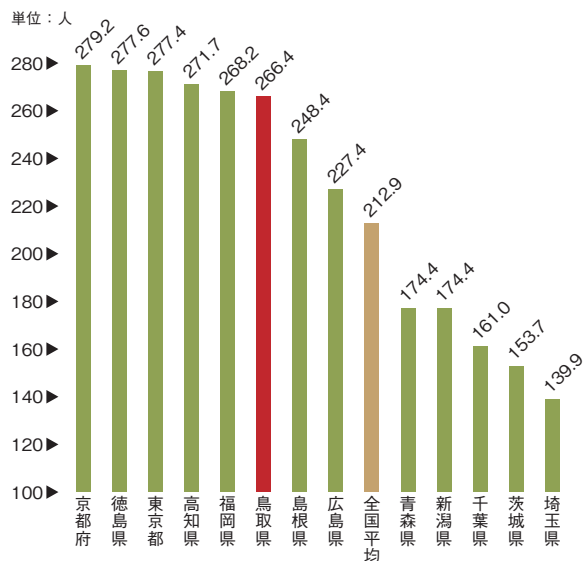
### 県内では、20代医師働き盛りの40代の医師が減少傾向

日本の全体から鳥取県の医療を評せば、たとえば2008年12月現在の統計で人口10万人当たりの医師数は、266.4名。これは、全国平均である212.9人を大きく上まわり、都道府県別のランキングでは、6位に位置します（資料1…全国と鳥取県の医師数）。

ですが、上位にランキングしているからと安心してはいられません。世界的視野に立てば、OECD先進10カ国平均に届いていませんし、何より、内実として医師の地域偏在（資料2…鳥取県内の医師数の状況）、診療科偏在があるからです。不足は、小児科、産

資料1：全国と鳥取県の医師数（人口10万人当たり）

（2008年12月現在・医療施設従事医師数）



婦人科、そして特に救急科において深刻です。

もっと細かく年齢ごとの医師数の推移を見ていくと、若手と呼べる20代医師、さらには、働き盛りの40代医師が減少傾向を示し（資料3…鳥取県の医師数の推移）、世代間格差が生まれつつある点に憂慮の声があがってまいま

す。  
また、2004年度に導入された新医師臨床研修制度により、県内で研修する研修医が減ってきているのも大問題です。

## 労働環境整備の側面からさまざまな施策を導入予定

これらの課題解決に向けて、当院には2つの使命があると考えています。ひとつは救急の現場を維持すること。これについては、前述したとおりの努力を継続します。もうひとつは、医師養成の場として魅力的で活力ある病院づくりです。

研修病院は、本来的には研修プログラムの充実ぶりで研修医から研修先に選ばれるべき。当院もフレキシブルで実力がつくプログラムの構築に余念なく臨んでいます。病院は研修医にとって職場であるのも、また一方の現実であり、労働環境整備が遅滞すれば、

せつかくのプログラムも色あせてしまうでしょう。

当院では、2009年度、労働環境整備の側面からさまざまな施策を導入し、研修医給与の見直しも行いました。

2010年度には住居手当新設の予定です。さらに、学会等参加の出張費、宿泊費の補助、男女協働参画の視点に立ったワーク・ライフ・バランスの充実を図ることなどを検討しています。

## 医療発祥の地とされる伝統と、先進医療を広く情報発信していく

私は、医療を学ぶにあたって、鳥取県はとても恵まれた環境を有すと考えています。まず、一般に日本海沿岸地

域は冬の日照が不足すると認識されていますが、明らかに誤解。統計上の日照時間は、関東地方と同等です。そのうえ、海が近く山も近い地形から、サマースポーツも、ウィンタースポーツも、マリンスポーツも、山登りも気軽に楽しめます。さらに、海の幸、山の幸に恵まれ、旨い食べものが盛りだくさん（笑）。オンとオフにメリハリがほしい研修医には、魅力的な条件がそろいすぎるほどそろっています。

ちなみに、文化的な興味を刺激して



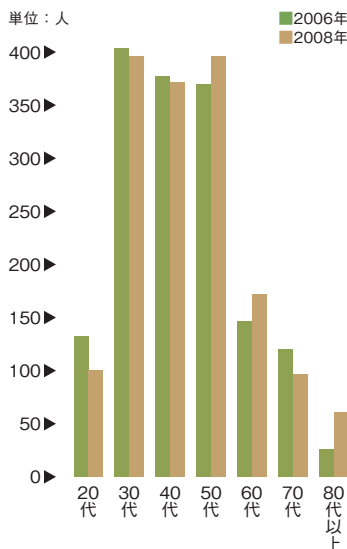
止まないのも、鳥取県、山陰地方の特色。何しろ、神話で日本発祥の印とされる出雲大社があり、日本の医療の発祥と指摘される「因幡の白兔」の神話の舞台は鳥取県なのです。銅矛文化と銅剣文化の融合が唯一、確認されている荒神谷遺跡などには、この地域の歴史の深さにロマンを感じずにはいられません。

私が、鳥取大学医学部附属病院長として明らかに反省すべきと自覚するのは、当院と鳥取県の研修環境の魅力が広く発信する努力が足りなかった点です。歴史を持つゆえのおごりがあつたと言われるなら、あえて反論はいたしません。

明治年間以来の伝統、地域医療を担う誇り、そして全国有数の先進医療の数々。それらの事実に基づき、目を向ける医師がひとりでも多く生まれるべく、今後、広報活動にも大いに注力していきます。

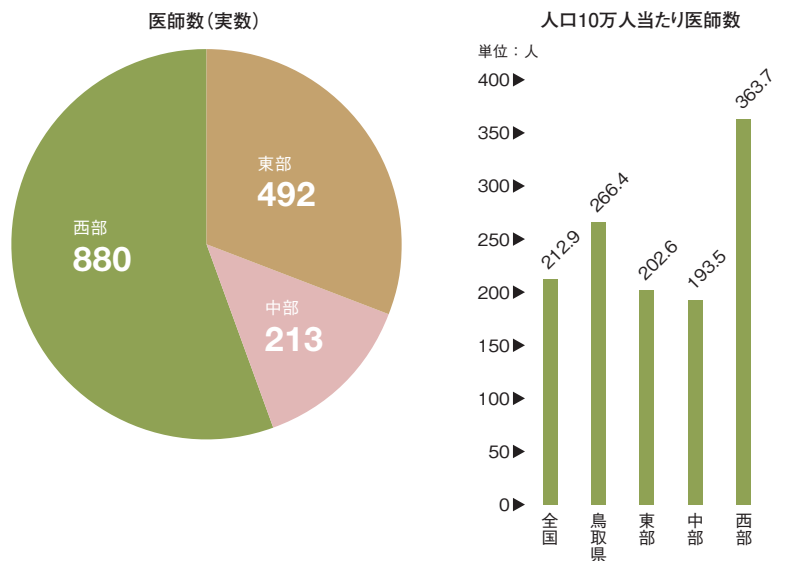
資料3：鳥取県の医師数の推移

(2008年12月現在・医療施設従事医師数)



資料2：鳥取県内の医師数の状況

(2008年12月現在・医療施設従事医師数)





## この人に 注目



小児神経学を  
学んだ地／鳥取に、  
療育のエキスパートとして留まる。  
なんと幸せな、小児科医人生か。

鳥取県立総合療育センター 療育支援シニアディレクター

# 北原 侑氏

米子市上福原にある鳥取県立総合療育センターが、  
しっかりととした冬の冷たさに包まれ始めたころ、同センターにその人を訪ねた。  
北原侑氏に会って、初めて鳥取が小児神経学のメッカであるを知った。

北原氏は、2002年から（当時、  
鳥取県立皆生小児療育センター）  
2009年3月まで同センター院長を  
務めた後、同年4月から県内の療育

（小児リハビリテーション）を統括す  
るシニアディレクターに就任した。彼  
の胸には、子どもに自己紹介するかの  
ように「シニデレ（シニアディレクタ  
ーの略）」のプレート。笑顔は常に柔

らかく、優しく、言葉選びは丁寧で前  
向き。こちらの気持ちも自然に和らい  
でくる。

2005年に竣工した本センターは  
肢体不自由児のみならず重症心身障害  
児、発達障害児等を療育する施設。ま  
た、小児期に限らず生涯にわたった療  
育を提供する役割も担っています。施  
設環境、先進性ともに全国有数のもの

で、療育や小児神経学に理解の厚い鳥  
取県の医療行政、福祉行政の象徴と言  
っていいでしょう。

鳥取県が全国に誇る先進医学分野の  
ひとつに小児神経学がある。1971  
年、鳥取大学医学部に大学の小児神経  
科専門診療部門としては日本の先駆け  
となる脳神経小児科が設立された。北

原氏は、「最高の小児神経学」を学ぶため、関東から鳥取大学医学部附属病院に身を投じた若者だった。

当時、小児神経学に取り組む大学は鳥取大学だけだったわけではありませぬ。東京にも選択肢はあり、埼玉県に育ち、千葉大学を卒業した私にとって、そちらのほうが簡単な選択だったでしょう。ただ、同じ学問ながら、東京と鳥取では明らかにフィールドの環境が違っていました。東京では数多くの患者、膨大な症例のもと治療と研究が進む。一方、鳥取の小児神経学は、ひとりの患者を長期間じっくりと診られるフィールド。小児神経学を学ぶならば、圧倒的に後者が魅力的でした。

鳥取県では小児神経科医の役割への評価が高く、行政は、県立病院への小児神経科医の配置、東部、中部、西部（県立総合療育センター）の療育園の整備に積極的で、2005年には県立の病院と施設に合計8つの常勤職を設けた。高い評価は県内にとどまらず、鳥取大学には毎年、全国から小児神経学を学ぶため多くの医師が訪れる。

鳥取県は間違いなく小児神経学の先進地域です。鳥取大学に脳神経小児科をつくった有馬正高教授はあまりにも有名ですが、後の世代にも、たとえば「5歳児健診」を提唱した同大学の小

### 「医学モデル」と「生活モデル」の対比

	医学モデル	生活モデル
目的	疾病の治癒、救命	生活の質の向上 (QOL)
目標	健康 (生理的正常状態の維持)	成長・発達 (遊び・行動の広がり)
主たるターゲット	疾患	子ども
主たる場所	病院・施設	家庭・地域社会
チーム	医療従事者	いろいろな人
指示形式	命令	協力
対象の捉え方 (WHO)	医学モデル：「病因 - 病理 - 発現 (症状・徴候)」	生活モデル：「機能障害 - 活動 - 参加」

枝達也教授がいます。全国的には1歳6ヵ月児健診、3歳児健診が普及していますが、小枝先生は発達障害の早期対応には5歳児健診が必要だと提唱。鳥取県は全国で唯一、県下全域で5歳児健診が施行される県になりました。

鳥取大学医学部附属病院を舞台に、小児神経学とともに小児の運動発達の研究に取り組んだ北原氏の興味を中心

は、やがてリハビリテーションにシフトしていった。

日本の医療に育ち始めた「ケア」の視点に大きな意義を感じました。医学の粋を集めて治そうとする努力も尊いものですが、治らない場合には、いかに病を受け入れ、受け入れた生活をいかに充実させるかといった視点が欠かれない。いわゆる「医学モデル」から「生活モデル」への発想の転換です。

広井良典：ケア学,p.37,医学書院,2000の表を一部改変

## この人に 注目

自らの意思でリハビリテーションを学ぶために東北大学病院へ転出、一度山陰に戻り、再度転出し、北九州市の市立総合療育センター副所長に就任。後に所長となって2002年までの計12年を同地で過ごす。

その間、北原氏は、「障がい治すことを目指すリハ」から「障がいを受け入れ、生活を充実させることを目指すリハ」へ」を提唱する、療育・小児のリハビリテーションの第一人者となっていた。

そんな北原氏にとって、鳥取県に戻り、最先端の療育をかたちにする取り組みは、おそらく医師人生の総仕上げなのだろう。

このセンターで繰り返し広げられているのは、「明日のために今日を我慢する療育・リハ」ではなく「明日を拓く、今日の楽しみの療育・リハ」です。たとえば、これまでの個別訓練を真ん中に置いたリハビリテーションは、約束の時間に来てもらい、決まった時間の訓練をこなし、「ありがとうございました」と帰ってもらって終わり。私たちは、そこに親の参加、学校の理解を求める地域リハビリテーションの手法を導入しています。

障がいを持った子どもたちの可能性を見出し、可能と判断すれば訓練をして、自分でバスや電車に乗って帰宅し

てもらおう。緊急時に備えて携帯電話が使えるようにするなどの努力を重ねるうち、鉄道会社も積極的に協力してくれるようになりました。それこそがまさに、療育なのです。

北原氏の取り組みは療育を志す医療者の間で、注目されている。見学や研修の申し入れが、全国から舞い込んでくる。

心強いのは、若い世代に、この分野への理解者、志望者が着実に増えている点。確かに療育は「医学モデル」ではなく「生活モデル」。完治、寛解の達成感を求める医師には、魅力は見つけづらいでしょう。けれども、子どもの運動発達、言葉の発達などを長時間か

けて観察する面白さは、ほかでは味わえません。

「子どもの発達過程において医療はいかなるアプローチができるか」は、きわめて奥が深く、研究の可能性にあふれているのですよ。

壮大な医師人生をつづける北原氏。半生を振り返り、満足げに幸運な出会いへの感謝に満ちた表情を見せた。

学問分野に興味はありましたが、正直、関東育ちの私にとって鳥取県は「日本の果て」以外のイメージがない土地でした（笑）。しかし、日本の果ては、来てみれば小児医療の先進の地であると同時に、自然が豊かで住みやすく、人情味いっぱいのお地だった。もう離れられない真のふるさともなりましたね。

小児神経学と療育と鳥取——幸せな出会いに恵まれた、すばらしい半生だと思っています。



鳥取県立総合療育センター内にはさまざまな絵も飾られている

### Profile

きたはら・ただし

- 卒業大学 千葉大学医学部
- 1970年 鳥取大学医学部附属病院
- 1972年 松江赤十字病院
- 1973年 鳥取大学医学部附属病院
- 1980年 東北大学医学部附属病院鳴子分院
- 1986年 松江整肢学園(肢体不自由児施設)
- 1990年 北九州市立総合療育センター
- 2002年 鳥取県立皆生小児療育センター院長(肢体不自由児施設)
- 2005年 鳥取県立総合療育センター院長(皆生小児療育センターから改名)
- 2006年 鳥取県立総合療育センター院長(肢体不自由児施設、重症心身障害児施設)

鳥取県立総合療育センターの見学などのお問い合わせ先

**鳥取県立総合療育センター**

〒683-0004

鳥取県米子市上福原7丁目13-3

TEL(代表) : 0859-38-2155





1よりも10、10よりも100と、  
経験を積みれば積むほど、  
つづける力になるのではないのでしょうか。

鳥取大学医学部皮膚病態学講師

# 山田 七子氏

## Profile

やまだ・ななこ

- 1992年 鳥取大学医学部医学科卒業  
鳥取大学医学部附属病院医員(研修医)
- 1994年 鳥取大学大学院医学系研究科博士課程入学
- 1998年 鳥取大学医学部皮膚科助手
- 1999年 松江赤十字病院医師
- 2000年 米国ボストン大学医学部リサーチフェロー
- 2001年 鳥取大学医学部皮膚科助手
- 2004年 鳥取大学医学部皮膚病態学講師

鳥取で活躍する  
女性医師

Nanako Yamada

## 鳥取の医療を選んだ 動機は幼少時の かかりつけ医の記憶

山田氏は、自らの意思で出身地である鳥取での医療を選んだ。

「大学に進学する時点で、別の大学に進む選択肢もありました。県外に出てみたいという希望もありましたが、鳥取大学は二者択一の選択肢のひとつとして常に自分の中に取りました。

生まれ育った地には愛着がありますし、実際に地元で医療に参加するようになるのと、地元の医療が充実してほしいとの願いは、ますます強くなりました」

進路を決めた際、何がきっかけになったのか、自分を見つめる過程で甦った記憶があったという。

「我が家のかかりつけ医の開業医の先生の存在も大きかったと思います。その方は、何十年にもわたり地域の医療を支えておられ、家族の病気を親身に診ていただきました。自分が医者になつてみると、そのありがたさが、さらによくわかりました。

若いときに、地元を離れるという選択は、きわめて自然なことでもありませんが、年齢や経験を重ねて地元に戻つてこられたときに、地元にいた人も帰つてきた人も、互いに連携し、情報を

共有し合つて、より鳥取の医療が充実し、発展していけば良いですね」

## ヒアリングから 生まれた 『女性医師情報交換会』

山田氏の鳥取大学の医局入局は、今から18年前。女性が積極的に社会進出をし始めたころで、時代は、明らかに変わりつつあった。

「医局では、女性だからという理由でチャンスを与えられなかった記憶は皆無です。男女の分け隔てなく、がんばりがきちんと認められる環境だったと思います。しかし、私自身は、出産、子育てがなかったので、女性の抱える大きな問題に直面することなく、こうしてつづけてこられた部分も大きいと思います」

現在、鳥取大学医学部附属病院には、『女性医師情報交換会』と称する組織がある。山田氏は、その代表を務めている。

「この組織は、病院長の声かけから生まれました。女子学生や若い研修医等にヒアリングをする中で女性ならではの悩みを抱えている方がたくさんいるということがわかったためです。『女性医師情報交換会』は、当院の女性医師就労環境改善への前向きな姿勢を表した活動と言えるでしょう。会則等があ

るわけでも、正式に会員を募っているわけでもありませんが、女性医師向けの講演会等の情報提供、女性医師の要望や意見を吸いあげるヒアリングなど地道な活動を始めています」



ゆるやかにスタートした女性医師の交流、情報交換の中から意義の大きな提案も生まれている。

「出産、育児を経験し、職場に復帰した女性医師が、病児保育の必要性を指摘してくださり、私たちが取り組むべきテーマをひとつ発見できました。実際にご経験された方ならではの視点からのご意見は、本当に貴重ですね。

この組織は、男女問わず働きやすい環境づくりのために設立される予定の『ライフ・ワーク・バランス・サポートセンター tomorrow』に、近い将来、吸収されることになっていきます。

そこをきっかけに、院内の、女性のための環境整備や働き方の提言など、

もっと目に見える貢献ができるようになるはずです」

### 経験を積むことが仕事を つづける力になる

「医師という仕事は、1よりも10、10よりも100と、経験を積みれば積むほど、それが、仕事を継続していく力になるのではないのでしょうか」

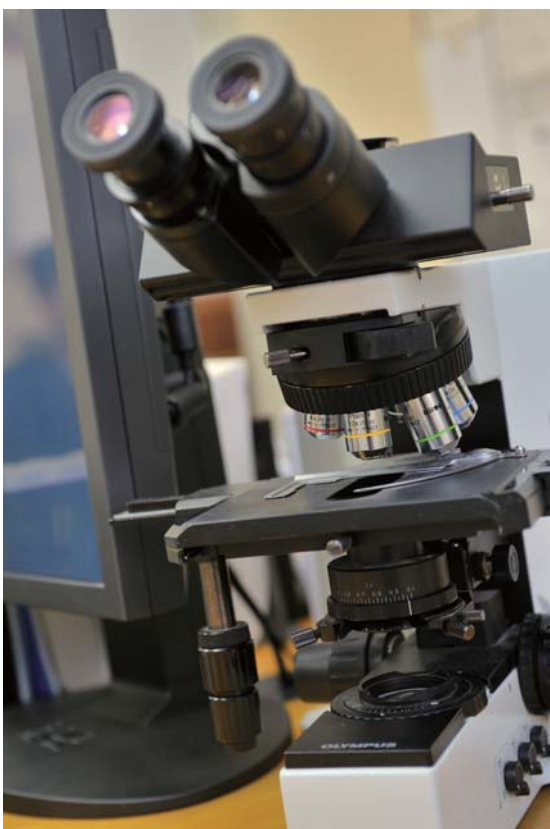
医師として積極的にキャリアを積み上げてきた山田氏の口から発せられる言葉は、強い説得力をもって響く。

「最初に博士号、専門医資格と目標設定をしました。少しずつ目標と到達を繰り返していくことは大切だと思います。ただ、根本的には医師という職業

にはゴールはないなあと日々実感しています。いまだに悩みながら、また、教室のスタッフと議論を重ねながら、研修を受けているような気持ちで毎日過ごすことが多いですね。教室の若い医師ががんばっている姿を見て、自分もがんばらなければと逆に励まされることもあります。

何より大切なのは、あきらめてしまわないこと。事情でいたし方ないならばフルタイムでなくてもかまわないので、とにかく少しずつでも経験を積んでいくことが大切だと思います。

また、医師であるとはいっても、若い間は『女性であること』と『医師としての責務』の間で板挟みになり、悩んだりも思います。けれども最近、それは当然のことだと思えるようになりました。何ごとに関しても、『あれも、これも』手に入れることは難しいかもしれませんが、少なくとも悩むことは『医師としてあってはならないこと』ではないでしょう。悩みながら、両者の立場を尊重し、うまくバランスをとりながら、医師としての経験を積み重ねていければ理想的だと思います」



## 鳥取で活躍する 女性医師

Nanako Yamada

来たれ  
研修医!

# 鳥取県立中央病院

鳥取市江津に所在する鳥取県立中央病院は、  
来年度、県下唯一の卒後研修医フルマッチを果たしている。  
新制度発足後5年間で計40名の研修医がひとりの脱落者もなく羽ばたき、  
しかも、ここ2年間では全員が山陰地方に残り  
医療に取り組んでいるそうだ。  
同院の研修の実際と魅力を臨床研修支援室長／内田博氏にうかがった。



当院の卒後研修で、  
一目では見抜けない  
各々の中に眠っている可能性を  
引き出してみせる自信があります。

臨床研修支援室長

内田 博氏

Q 貴院の卒後研修には、どのような特徴がありますか。

まず、伝統に支えられた環境が挙げられます。当院の卒後研修は、自治医科大学1期生が卒業した年、1978年にスタートしました。医局全盛の時代に、医局に属さずスーパーローテートする医師の姿、成長ぶりを全職員がその目で見てきた歴史が、文化をつく

は、精神的な部分も含めて万全だと自信を持てます。7年目以降の指導医の84%（2009年実績）が指導医講習会に参加しているのも「万全」を示すひとつの証でしょう。

Q 次にプログラムの特徴を教えてください。

たとえば、「パラシュート研修」は1

つているのです。当院では、研修医を労働力と見る者などおらず、目の前にいる若者がいづれ立派な臨床医になるイメージが全職員にできています。ですから、卒後研修に関する協力的体制、応援体制

年を通して接する機会が稀な手技などを体験するための研修です。まず、気管切開からスタートさせました。パラシュートとは、ピンポイントで研修を受ける意味で、耳鼻科で気管切開が行われる場合には、研修医に連絡が行きます。

Q 創意工夫にあふれていますね。

創意工夫は、まだまだあります。当院の卒後研修は、研修医自身の声の色濃く反映される仕組みで、たとえば2年目のスケジュールは、基本的に2年生全員が集まり、合議のうえで決められます。「ひとりでも反対者がいれば、支援室が決める」と少々脅かしたので

(笑)、みんなが真剣に話し合い、納得のいくローテーションが組み上がっています。

また、毎週木曜日に開催される研修医カンファレンスは、講義のテーマを選び研修医に任せてあります。運営も自主に近い状況ですね。

現状に満足して立ち止まっただけは流されてしまいます。常に、改善を加え、前進するところが当院の卒後研修の特徴です。

**Q** 研修の雰囲気、研修医の気風などはどうでしょう。

研修医は皆、自主的で能動的で元氣者ばかりです。また、当院と、この地域への愛情と愛着が、とても強い。1年目の新人研修医が、見学の医学生に「この研修は、おすすぬ」と自然に勧誘してくれるのがうれしいですね。

**Q** 臨床研修支援室長として、先生が心がけていることは？

丁寧なフィードバックを心がけています。私も含めた指導医が研修医に発する言葉、態度、提供する情報は、すべて彼らの血となり肉となります。何をどのような表現で伝えるのか、瞬間、瞬間、常に真剣勝負です。

**Q** 昨今は、研修医も含めた勤務医を対象に、メンター制度を導入する病院が増えています。

当院にも、研修医対象のメンター制度があります。ですが、いい意味で、機能していません。利用する研修医が皆無だからです。心が辛くなり始めた研修医がいると、自己申告の前に同僚からの報告が私のもとに届きます。私は密かに、「たれ込み制度」と呼んでいるのですが(笑)、研修医の状況を知るには、これをもっとも正確で速い。そんな情報が寄せられた研修医に対しては、そっと近づき「楽しい？」と話しかけます。「楽しいです」と返って

くれば、少々疲れ気味でも大丈夫。そうでない場合は深刻ですから、膝を突き合わせて話を聞きます。

**Q** 貴院の卒後研修の成果をどう評価しますか？

新制度下5年間の計40名の卒後研修医が、ひとりの脱落者もなく羽ばたいていったこと。彼らの多くが、山陰で医療に取り組んでいること。試行錯誤しながらですが、それなりの成果が出せ、うれしい限りです。

**Q** 来年度の研修医は、8名がフルマツチであつたとうかがいました。

実は今年度のマッチング率が半分にしかなかったら、臨床研修支援室として、たいへん落ち込んでいました。来年度はそうあつてはならないと心を引き締め、打ち出したいくつかの方策が実を結んだように思います。

**Q** いくつかの方策とは？

もっとも力を入れたのは、2009年5月の、NPO法人卒後臨床研修評価機構の認定取得です。山陰地方では初、全国で65番目の認定取得です。また、昨年の失敗例を振り返った結

果、私たちは研修内容に自信を持つあまり、少々慢心していたと反省しました。「研修医が選んでくれればいい」から「情報発信を含め、研修医が選びたくなる病院にしよう」と自己改革をしました。

**Q** 2009年12月、臨床研修支援室が鳥取県知事表彰を受けました。認定取得やフルマツチが受賞理由になっているようですね。

予想していなかった表彰で、とても喜んでいます。臨床研修支援室は、研修医に良質な研修を提供するのが役割で、決して医師確保のために存在するわけではありません。

マッチングを果たすための活動を手がけた結果、医師確保に貢献でき、うれしく思います。

**Q** 最後に、求める「研修医像」をお教えてください。

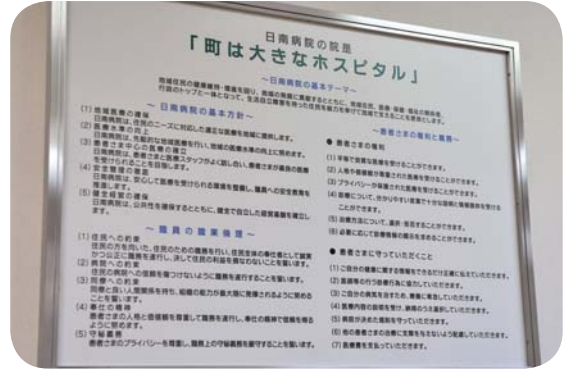
以前は、「協調性のある方大歓迎です」と言っていました。今では、当院を希望する方なら、どなたでも大歓迎です。医師のポテンシャルは協調性のみではないからです。研修医一人ひとりが自らの個性を伸ばしながら研修することを支援します。







院長の高見徹氏



院内に掲げられた病院のスローガン

# 医療は闘いであり、総力戦であるべき。

■日南町は、町村合併のうねりの中、合併せず単独で歩むことを選んだ町。現在、約6000人の町民のうち約45%を高齢者が占める。

医療の最前線に立つ院長の高見氏は日南病院を「地域づくりをする病院」と表現する。

「まるで、有史以来そうであったかのように錯覚されていますが、医療が病気だけを診るようになったのは、つい最近。本来、医療は地域を、人を、相手にし、病気以外のことがらと向き合いつながり、人々の幸せとともにあるものです。」

したがって、医療は闘いであり、医師が能力を出し尽くさねばならない、医療が多岐の人々を巻き込むという意味で総力戦であるべきなのです」

日南病院の成功は、早くから行政当局と町民が総力戦の必要性を理解して病院に協力し、医療に参加してきたがゆえ。町に過疎の影が色濃くなってきた1980年代に、病院はほぼ現在のスタイルになった。それは、連続黒字の始まった時期とも一致する。

■「実は、私は1985年に大学（鳥取大学）からの派遣で、1年だけ本院

で勤務をした経験があります。そのとき病院の総力戦の様子を知り、強く興味をひかれました。派遣期間が終了する際に『大学を辞めたら、ここに来ます』と言い残し、いったん町を離れましたが、宣言どおり戻ってきました」

黒字経営の秘訣についての質問に高見氏は次のように答えてくれた。

「当院は、2007年統計で一般病棟の在院日数が12・8日。大きな急性期病院と肩を並べる短さです。なぜ、そんなことが可能かと言えば、日南病院では寝たきりでも、可能な限り自宅で過ごしてもらうから。そして、介護者が『ぎりぎり』になったら、いつでも病院が引き受けます。

そうするには、病院のベッドの空きが常に必要で、病院はその努力を怠りません。必要とあれば、私が自ら患者さんに『退院勧告』もします。病院のベッドにはいつでも空きがあり、『いざとなれば病院が引き受けてくれる』という安心感が形成されれば、全町民が寝たきりの引き受けをなんとか受け入れてくれる。町民の皆さんの協力を得ての総力戦の結果が、町の財政に負担をかけない黒字経営に結びついているのです」

■院長自ら救急車を兼ねた病院車の助手席に座り、日課である訪問診療に出

## 病院探訪

# 日南町国民健康保険 日南病院

鳥取県に日南病院あり。1962年の開設以来、高齢・過疎化の進む日南町において町民に支持される地域医療を展開する同院は、同時に、自治体病院でありながら26年間（2008年度現在）黒字経営を維持し全国から評価と敬意を寄せられていると聞いた。

病気だけでなく、患者だけでなく、町全体を診る「あたたかな医療」を、今は院長の高見徹氏が支える。



訪問診療をする高見徹氏と看護師、ドライバーの方



病院見学者は高見氏の訪問診療に同行することで単なる「地域の医療」と総力戦の「地域医療」の違いを知る

向く。患者の容体をその場でパソコンに打ち込み、カルテを更新し、次の診療日を決定して、さらに、次の訪問先へ。近年の病院全体の訪問診療件数は年間約2000件、訪問看護は年間約1000件。病院からは、毎日のようにスタッフが町に飛び出していく。

「町は大きなホスピタル」——同院ホームページのトップページに記されたキャッチフレーズだ。

「『家庭のベッドは病院のベッド、町の道路は病院の廊下』という合い言葉もあります（笑）。どちらも私が提唱したわけでなく、長年、日常的に言われている言葉です。病院から、医師や看護師が出て行くことが当たり前になれば、家庭は老健にもなるし、特養にもなる。それらの言葉は、病人は病院だけが診るものではないのだとのメンタリテイが、町全体で共有されている証でもあります」

■日南町で展開されている先進地域医療は、いつか大都市での医療モデルになると高見氏は確信を持つ。

「超高齢化が進む日本において地域で起きている医療問題がいつか都市の問題になるのは火を見るより明らか。そのとき、日南町で何が行われていたかは大いに参考になるでしょう。ただ、大都市で生まれたものを地方に伝播さ

せるのは容易ですが、その逆は、かなりハードルが高い。しかし、それを行うことが私の義務だと思っています。日南町の成功例を知りつつ、都市医療が崩壊していくのを医師として見すぞすわけにはいきません」

■来るべき超高齢化社会に向けての、高見氏の使命感は大きい。病院に研修医を受け入れ、見学者の来訪をいとわず、休日も休まず自ら出かけ、日南町で行われている医療に関して講演し、論説する。

## 日南町の成功は必ず大都市での医療モデルに。

「地域医療が成立するか否かの分水嶺は、地域でもっとも大きな病院の、勤務医の理解と協力にかかっています。拠点病院が、いつでもベッドを空けて待っている体制がなければ、高齢者医療、在宅医療は崩壊する。つまりは勤務医が頭の中に『在宅医療を病院のベッドがバックアップする』との着想を持つかどうか、きわめて大事。地域医療に関心のない医師にも地域医療への見識は持ってもらわねばならない。そのためにも請われればどこにでも行きますし、見学の医師も大歓迎です」

日南町国民健康保険日南病院の見学などのお問い合わせ先

**日南町国民健康保険日南病院**

〒689-5211

鳥取県日野郡日南町生山511-7

TEL : 0859-82-1235 / FAX : 0859-82-1341



## 『KLINIKOS』冬号の 編集を終えて

取材してみると、鳥取大学医学部には、附属病院が引き継ぐ鳥取県立病院米子支部病院（1893年）と、終戦間際に官立医学専門学校として誕生し、そのまま終戦後の医療復興を担うことになった米子医学専門学校（1945年）の伝統が合流した、たおやかな歴史の流れがありました。

同大学からは、ネパールの医療に貢献し同国国民から「ネパールの赤ひげ」と慕われ、アジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞を受賞した元神戸大学医学部教授／岩村昇氏、現在、総合診療科の旗手と評される千葉大学医学部附属病院総合診療部教授／生坂政臣氏、日本のiPS細胞研究において京都大学教授／山中伸弥氏との強力なパートナーシップが注目される鳥取大学大学院医学系研究科教授／押村光雄氏など、大きな名声を得た人物、時代を牽引する人材が多数輩出されています。

残念なのは、そのような誇るべき歴史、輩出された人材について、あまりに情報が発信されていない点です。功績を大声で吹聴しない、鳥取県民の謙虚な県民性のせいもあるのですが、鳥取の医療のすばらしさは、もっと広く発信されてしかるべきでしょう。

『KLINIKOS』発刊を通して、鳥取県で医療に従事する誇りや鳥取県で医療を学ぶメリットを、ひとりでも多くの医師にお伝えできれば、それに勝る喜びはありません。

制作スタッフ一同

### STAFF

発行	鳥取県福祉保健部医療政策課 ( <a href="http://www.pref.tottori.lg.jp">http://www.pref.tottori.lg.jp</a> )
編集制作	株式会社メディカル・プリンシプル社 ( <a href="http://www.medical-principle.co.jp">http://www.medical-principle.co.jp</a> )
編集協力	株式会社カレット ( <a href="http://www.care-t.co.jp">http://www.care-t.co.jp</a> )
編集長	中村敬彦
副編集長	及川佐知枝
制作コーディネーター	杉浦美奈子
ライター	清水洋一
カメラマン	木内博
アートディレクター	鈴木道雄

**KLINIKOS**  
ととりの医療  
冬号  
2010 winter

# 鳥取県では、地域医療を支える医師を求めています。

## 鳥取県医師登録・派遣システム(鳥取県ドクターバンク)

地域医療に携わりながら、医師のキャリア形成を図ります。

### 地域医療ローテートコース

本人の希望等(キャリアビジョン)により、長期の派遣等の計画を策定して自治体立病院等への派遣を行います。

- 派遣等計画には、県立病院、鳥取大学医学部における研修期間を設定することができます。
- 派遣先、派遣計画期間の終期などは相談に応じます。

子育て等で現場を離れた医師の復帰を支援します。

### 子育て離職医師等復帰支援コース

子育てなどにより現場を離れた医師を対象に、現場復帰のための研修を県立病院、鳥取大学医学部附属病院などで行います。

- 本人の希望等により勤務時間、勤務日数等を調整します。(この場合は非常勤採用となります)
- 研修期間は最大で1年間です。(相談に応じます)

県内医療機関の求人をご紹介します。

### 無料職業紹介コース

県庁内に「無料職業紹介所」を設置し、鳥取県内の医療機関からの求人情報の提供及びこれらの医療機関への就業のあっせん、紹介を行います。

- 無料職業紹介の場合は、各医療機関が直接雇用することとなり、県職員の身分は付与されません。
- 給与等の勤務条件は各医療機関規定のものとなります。
- 採用の可否は求人医療機関が面接等により決定します。

## 鳥取県専門研修医師支援事業

県外の医療機関で研修を行い、その成果を県内で活かしていただく医師を支援します。

鳥取県ドクターバンクの定員枠を利用し、県職員(知事部局常勤)として採用し、県外病院に対して研修派遣(6か月~2年)を行います。

- 研修後、鳥取県の医療に貢献しようとする医師(医師免許取得後おおむね5~10年目程度)であれば、出身地、出身大学、応募時の勤務先等は問いません。ただし、臨床医に限ります。
- 研修テーマは、「本県において必要とされる分野」にある程度限定します。(詳細な研修内容は、応募~選考時にプレゼンテーションしていただきます)
- 研修先医療機関は、日本国内に所在するものに限りします。
- 研修修了後は、県内医療機関で研修期間の2倍に相当する期間の勤務を求め、習得技術の県内医療への還元、県内の若手医師の指導等に当たっていただくことを求めます。(採用時に県内勤務を定める「誓約書」を提出いただきます)
- 県内勤務の際の勤務先については、限定はしませんが、引き続いて「鳥取県ドクターバンク制度」に参画いただくこと等を想定していますが、研修分野などに応じて柔軟に対応します。

■お問い合わせ先



このみずみずしさを未来へ

鳥取県

鳥取県庁福祉保健部医療政策課

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220 TEL0857-26-7195

FAX 0857-21-3048 E-mail:chiiki-iryoku@pref.tottori.jp

詳しい条件等は鳥取県ホームページ (<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>) をご確認ください。